



本会記事

■第12回核融合エネルギー連合講演会報告

現地実行委員会 京都大学 小西哲之, 南 貴司

表記連合講演会が2018年6月28～29日、大津市のピアザ淡海（「おうみ」と読む）で開催された。サブタイトルは原型炉への路線を明確に示した文部科学省の「アクションプラン」を受け、「核融合炉のロードマップ：今、実用化に向けて！」である。今までの11回のテーマに比べ、初めて「実用化」というキーワードを使い、本講演会を交互に主担当する日本原子力学会にまして、プラズマ・核融合学会がアグレッシブな姿勢を見せたところである。じつはこの連合講演会、1995年に第1回を京都で開催して以来、我が国核融合研究の発祥の地の一つであり今もヘリオトロン」はじめ多くの研究者の属する京大が、その後一度も実行委員会をやってないので、内外のプレッシャーを付度してOB含む全体制でやらせていただいた。しかしこのところIAEA-FEC、ISHWやISFNTなど京都イベントが続いていたこともあったので、ここは意表をついて風光明媚な湖国滋賀での開催となった。講演の合間、企業展示会場などから湖が一望できるロケーションである。参加者総数373名（正会員253名、学生会員82名、その他38名）、企業展示13社、ポスター発表259件（ポストデッドライン2件含む）、懇親会参加者191名と、まずまずの盛況であった。

吉田善章会長・組織委員長の開会宣言に続き、来賓あいさつは国際法の専門で科学倫理の検討にも携われる滋賀大学の位田隆一学長にいただき、科学技術研究の社会との連携の必要性を訴えられて参加者の感銘を誘った。

基調講演は、ITER副機構長の多田栄介氏からITER建設の進展、坂本宣照氏（QST）の原型炉設計、磯部光孝氏（NIFS）のLHD重水素実験、東島智氏（QST）のJT-60SA建設、藤岡慎介氏（阪大）の高速点火の最新成果がそれぞれ報告された。

活況だったポスターセッションを挟んで、招待講演は文部科学省の松浦重和研究開発局研究開発戦略官が我が国の核融合開発戦略、秋元圭吾氏（RITE）が気候変動

問題における核融合エネルギーの意義を述べられ、それぞれ核融合開発の意義が最近急速に変わりつつあることを示唆された。

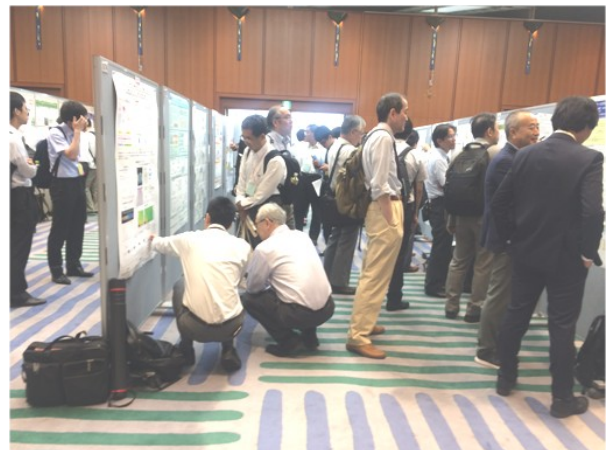
シンポジウムは初日にシミュレーションと加熱・電流駆動、2日目にブランケット、ダイバータ、ヘリカル・レーザーの将来計画、の計5件、それぞれに最新の成果と将来に向けた課題が報告された。

最後はパネルディスカッションで、エネルギーシステムとアウトリーチの問題、つまり外から見たときの核融合と、研究開発側からの対応について様々な切り口での報告があり、議論が交わされた。核融合研究開発は、最先端の学術研究であると同時にエネルギー開発であり、社会の要請に的確にこたえることが必要であることが改めて指摘された。

クロージングでは、まず、若手優秀発表賞授与式が開催されて受賞者8名が壇上で表彰を受けた後、最後に、深田智日本原子力学会核融合工学会会長（九大）により閉会が宣された。実は現地委員会は裏方をドタバタとやっていた講演を深く聞いてないので、セッション内容の記述が皮相なのはご容赦いただきたい。

今回特筆すべきイベントのひとつは、講演会前日に行われた市民講演会である。「未来を拓く日本の科学技術と地上の太陽」をメインテーマに、ロケット開発の渥美正博氏（MHI）、核融合について本多充氏（QST）と藤堂泰氏（NIFS）が、わかりやすく解説した。平日夕方に、核融合研究の地元でもない大津でどれだけの来場者があるか懸念されたが、約100名を集め、まずまず盛況で、ポスター配布や来場依頼に奔走した関係者は胸をなでおろしたのであった。しかし前述のようにアウトリーチや社会との連携が今や必須とみなされる核融合研究、この程度のイベントがこなせなければ未来は拓けまい。

もう一つの目玉は、言うまでもなく豪華船ビアンカを貸し切ったの船上懇親会である。現地実行委員会は、正直言ってこれがやりたくて？、と言われても申し開きできない。心配された梅雨空は願い通じて無事夕焼けとなり（関東で明けた）、大赤字の懸念も関係者の努力で何とか杞憂に終わり、黄昏から夜景へと移り変わる琵琶湖





の景色を眺め(あるいはそっちのけで), 湖畔の住人の笠田竜太氏(現 東北大)の名ガイドとともに美酒を楽しむイベントは, 未永く語り継がれるであろう.

次に京都でやらせていただく頃には, きっと核融合の火は燃えているだろう. エネルギーが出ているだろう. そのときには, 今回参加してくれた学生さんたちがきっと中核となっているに違いない. などと思いながら, 改めて今回の開催を支えてくださった皆さん, 協力してくださった地元や関係の方々感謝いたします.

